

(省略)

「さあ、デザトリアン。思う存分、暴れるのよお」
サソリーナの声に応えるように、デザトリアンが叫ぶ。

「ワタシヲミニナイデー」

露木えりんを素体としたデザトリアンは、丸いボールに手足が生えた形をしている。サソリーナが、えりんの心の花と体育館にあったバスケットボールを合体させたためだ。デザトリアンが右腕でグラウンドの地面を殴りつけると、土埃が舞い、衝撃で穴が開く。

「ワタシハコワイノヨー」

ふたたび、今度は左腕を振るう。

その拳が、逃げ遅れた一人の女子生徒の頭上に下ろされるようにした時。

「そこまでですっ」

凛とした、キュアブロッサムの声がした。ブロッサムは

デザトリアンの拳を真正面から受け止める。

「大丈夫ですか。早く、逃げてください」

女生徒は礼を言うと、慌てて走りだす。彼女の行く先を、キュアサンシャインが誘導している。

サンシャインは、他にもまだグラウンドに残っている生

徒たちに、早く避難するように呼びかけている。

「出たわね、デザトリアンッ」

キュアマリンが、力強い声とともに体ごと、デザトリアンにぶつかっていく。

「マリン・インパクトッ」

マリンの両手が、鮮やかな水色に輝く。水滴状のエネルギー波が塊となつて、マリンの掌底ごとデザトリアンに激突する。

だが、デザトリアンの体は少しぐらつくだけで、大きなダメージにはならない。

「まだまだ、これからよっ」

そう言うと、校庭に立ち、デザトリアンに向き合う。

生徒たちを逃がしたブロッサムとサンシャインも、それに並ぶ。

もう、グラウンドには生徒の姿はない。

プリキュアたちが、逃し終えたようだ。

「出たわね、プリキュア。さあ、これからが本番よおん」

サソリーナも迎え撃つ態勢を取る。

ブロッサム、マリン、サンシャインの三人のプリキュア、

そしてサソリーナとデザトリアンが対峙する。

しかし——キュアムーンライトは、何処だ。

月影ゆりは高等部にいる。異変にまだ気がついていないのか。これほどの騒ぎだ、それはない。

ただ彼女との戦いを待ち焦がれているというのに。

あの三人のプリキュアでは、力不足だ。

「あなたの相手は、この私よ。ダークプリキュアっ」

好敵手は遅れてやってくるものだ。

見下ろす先には、月影ゆりがいる。私を見上げ、睨み、

叫んだ。

まだ、変身していない。

ゆりが、欠けたプリキュアの種を高々と掲げる。

ココロポットに満ちる心の種の力が、蒼紫の光となり、

外に溢れ、プリキュアの種の欠けた部分を補う。

種は円となり、真の姿を取り戻す。

「プリキュア、オープンマイハート」

掛け声とともに、プリキュアの種をココロポットの蓋のくぼみに入れ、ハンドルを回す。

コンパクトが光り、無数の紫の薔薇の花とともに、ゆりの姿を包み込む。

「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト」

私の眼下に、彼女が姿を現す。我がライバル、キュアムーンライトが。

「ダークプリキュアは、私が引き受けるわ。あなた達は、デザトリアンをっ」

他の三人のプリキュアに指示を出すやいなや、地面を蹴り上げ、一直線に私に向かって飛んでくる。

その姿は、まさに閃光のようだ。

夕陽の中にあつて尚、彼女は青く鋭い一筋の光なのだ。

「待っていたぞ、キュアムーンライト」

上空から襲いかかる私の左の拳と、

「みんなの学園祭の準備を邪魔するなんて、許さないっ」

下で、それを受け止めるキュアムーンライトの右の掌が、

激突する。

さあ、戦いの始まりだ。

(以下、省略)